

---

# 天国からの新築祝い

えんぴつ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

天国からの新築祝い

### 【Nコード】

N3109C

### 【作者名】

えんぴつ

### 【あらすじ】

あの日、ぼくは必死で四葉のクローバーを探した。母さんのために……。でも、四葉のクローバーはぼくを裏切ったんだ。そして大人たちも。

「こんなところに四葉のクローバーが……」

新居に引っ越してきてすぐ、妻が「なによりお義母さんよ」と言  
つて、ぼくの母の仏壇の荷を解き、きれいに掃除してくれている時  
のことだった。

隣りでダンボールを束ねていたぼくに、妻が一冊の古ぼけたノー  
トを開いて見せた。

なにも書かれていない、その黄ばんだ白いページの上に、ちょう  
ど押し花のようになった四葉のクローバーがあった。

「あ、このノートは……」

ぼくは、咄嗟に妻の手からノートを奪い取った。

四葉がひらひらと床に落ちた。

「あれ、なんかありそうね」

妻がそれを拾いながら、興味を示した。

「いや、楽しい話じゃないよ。今日は2人の門出の日だしさ」

夜、仏壇の前でゆっくりと思い出すつもりの話だった。

「なら、余計に聞きたいわ。あなたのことはすべて知っておきたい

もの。門出の日こそね」

「せっかくの新居が湿っぽくなるぞ」

妻は「どうぞ」という風に微笑んだ。

仕方なくぼくは話し始めた。

あれは、ぼくが小学2年生の時だから、いまから19年前のことになる。

キミも知っているように、ぼくの母さんは、ぼくを女手ひとつで育てていたんだ。ぼくの父は、ぼくが幼い頃にひき逃げ事故で亡くなっていたから。

当然、ぼくの家の暮らしはラクではなく、子供の頃、どこかへ出かけた時、おもちゃを買ってもらったなんていう記憶はほとんどなかった。

洋服もそりゃあボロボロなものを着ていた。その頃、古着ファッションってというのが、たぶんもう流行っていたんだよね。だから、考えようによっては、流行の最先端だったかも。

「脱線はいい」

妻がいつぱいに開いていた窓を閉め、フローリングの床に正座した。

ぼくも放り投げていた足をあぐらに組んだ。

それでもね、母さんはやさしかったんだ。大好きだった。

いつも、夜はぼくをダッコして寝てくれた。ギュッて。

いまでも忘れられないなあ、あの母さんの温もり。

「四葉のクローバーを早く登場させて」

早くも涙腺の緩んだ妻が言った。

「ああ、ごめん、ごめん」

でさ、前にも話したけど、母さん、肺が悪くてさ。だけど、お金がないから病院にも行けなくて、家で内職とかしてたんだよ。

そんなある日、母さん、とうとう血を吐いて、倒れちゃって。病院に運ばれたら、緊急入院で。

母さん、親戚とかいなかったからさ。なんか近所のおばさんがいろいろやってくれて。

で、お医者さんが、ダメだって言ったんだって。そのおばさんに。

きつと、いい病院で手術とかすれば、助かったんじゃないかな。でもお金ないしね。

その時ぼくは、必死になって四葉のクローバーを探したんだよ。  
おかしいよね。

でも、小学2年生のぼくに出来ることは、それしかなかったんだ。  
お母さん、死んじゃやだ、死んじゃやだって。

病院の裏庭を一生懸命探したよ。

何時間ぐらい探したかなあ。

あたりが真っ暗になった頃、外灯の下でようやく見つけたんだ。

いまでも忘れないよ。あつたー！って、叫んだこと。

これでお母さんは死なないって。

で、喜んで病室に行つて、母さんに見せた。

母さん、苦しそうな顔してたのに、無理して、ニコリとしてくれて、ありがとつて。

大丈夫だよって。

「そうなんだ……」

妻がぼくの方を向かずに言った。

四葉のクローバーって、幸運のシンボルだろ。

でも、ぼくのなかでは、それ、不幸のシンボルだ。とにかく悔しかったなあ。

みんなの家は父さんも母さんも元気で、兄弟だっっていて、おじいちゃんやおばあちゃんまでいる家もあるのに、ぼくはひとりになっちゃったんだからね。

なんで母さんまで奪うんだよって、憎んだよ、神様を。

それからぼくは施設に預けられて、荒れたんだけど、ここから先の話はすでに妻は知っていた。

「ありがとう。話してくれて。さ、掃除、掃除と。がんばらないと飯抜きだぞ〜」

妻は立ち上がると、洗面所へ入って行った。

それにしても、よくこんなにきれいなまま、残っていたものだ。あれから何度かこのノートを開いたけど、こんな後ろのページに挟まっていたとは……。

ぼくは、四葉のクローバーをいろんな角度から見て、あの頃のことを思い出した。

特別に病室に折りたたみ式のベッドを置いてもらい、母さんの横で暮らしたこと。

病室から学校へ通ったこと。

看護婦さんがみんなやさしくて、ぼくにたくさんお菓子や果物をくれたこと。

母さんがぼくのこといっぱい触りたがったこと。

頬擦りばかりして、いつも最後は頬が涙で濡れたこと。

そして、この四葉のクローバーが母さんの病気を治してくれると信じていたこと……。

母さんは、ベッドの横にいつもこのノートを置いて、ぼくにいろんなことを書き残してくれていた。

そのノートに四葉のクローバーも大切に挟んで、「息子が探してくれた宝物なの。私もこれ見ると、治りそうな気になれる」と看護婦さんにうれしそうに話していた、その時の笑顔こそぼくが一番大事な宝物になった。

ぼくのことがかんなに喜んでもらえて、すごくうれしかった。

それでも、母さんは死んだ。

ぼくが学校に行こうとすると、いつもよりいっぱい頬擦りして、いつもよりいっぱい涙を流して、母さんは「ちゃんと勉強してくる

んだよ」って、ぼくに言っつて、昼ごろひとりで逝っちゃった。

ぼくが学校から呼び戻された時は、霊安室に寝かされていた。

四葉のクローバーはぼくを裏切った。

それからぼくが接した大人たちも、ことごとくぼくを裏切った。

だからぼくは荒れた。

立ち直らせてくれたのは、このノートだった。

あるページが、「ごめんね、ごめんね、ごめんね、ごめんね……」  
と、一面に書かれた母さんの「ごめんね」で埋め尽くされていた。

母さんの人生は、散々苦勞して、それでも最後まで息子のぼくに  
謝りつづけなきゃいけない、そんな人生だった。

ぼくが大人になろうとしていた頃、このノートを開いて、ぼくは  
幸せになることを決意したんだ。

ぼくが幸せなら、母さんはぼくに謝る必要なんてないから。

それからぼくは新聞販売店で住み込みで働き、夜学に通って、大  
学を卒業した。

まだ小さかったIT企業に就職し、いまでは曲がりなりにも取締  
役という肩書きが付いている。

よき伴侶も得て、新居も建てることできた。

待ってて、母さん。掃除が終わったら、大好きだった霞草を山ほど飾って、ちゃんとありがとっつて言うからさ。

ぼくは、母さんの遺影にそう話しかけた。

「ね、ね、あなた、ちょっと来て」

妻の声に、ぼくは庭に下りた。

「ジャーン」

妻の手の平に、四葉のクローバーがあった。

「いまそこで見つけたの。今度こそ、幸運のシンボルよ」

まだ造成したばかりの土が剥き出しの庭なのに、ちらほらと雑草が目立ち、クローバーの一群もあった。

「あっ！」

ぼくも目をやった瞬間に四葉を見つけた。

「どうやら我が家は幸運がいっぱいのようなね。お義母さんからの新築祝いかな」

初夏の澄んだ青空を見上げて、照れながら妻がそう言ってくれた。

天国からの新築祝い

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3109c/>

---

天国からの新築祝い

2008年8月29日17時55分発行